

岡の家

鈴木三重吉

青空文庫

岡の上に百ひやく姓しょうのお家うちがありました。家がびんぼうで手つだいの人をやとうことも出来ないで、小さな男の子が、お父とうさんと一しよにはたらいしていました。男の子は、まいにち野へ出たり、こくもつ小屋の中で仕事をしたりして、いちんちじゆう休みなくはたらかしました。そして、夕方になるとやつと一時間だけ、かってにあそぶ時間をもらいました。

そのときには、男の子は、いつもきまつて、もう一つうしろの岡の上へ出かけました。そこへ上あがると、何十町か向うの岡の上に、金きんの窓のついたお家が見えました。男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にいきました。窓はいつも、しばらくの間きらきらと、まぶしいほど光つています。そのうちに家の人が戸をしめると見えて、きゆうに、ひよいと光がきえます。そして、もう、ただのお家とちつともかわらなくなってしまいます。男の子は、日ぐれだから金の窓もしめるのだなと思つて、じぶんもお家へかえつて、牛乳とパンを食べて寝るのでした。

或日あるひお父さんは、男の子をよんで、

「おまいはほんとはよくはたらいておくれだ。そのごほうびに、きようは一日おひまを上げるから、どこへでもいつてお出いで。ただ、このおやすみは、神さまが下さったのだとい

うことをわすれてはいけないよ。うかうかくらししてしまわないで、何かいいことをおぼえて来なければ。」と言いました。

男の子はたいそうよろこびました。では、今日きょうこそは、あの金の窓の家へいって見ようと思つて、お母さまから、パンを一きれもらつて、それをポケットにおしこんで出ていきました。

男の子にはたのしい遠足でした。はだしのまま歩いていくと、往来の白いほこりの上に足のあとがつかまりました。うしろをふりかえつて見ると、じぶんのその足あとがながくつづいています。足あとは、どこまでもじぶんに、ついて来てくれるように見えました。それから、じぶんの影かげぼうし法師も、じぶんのするとおりに、一しよにおどり上ったり、走ったりしてついて来ました。男の子にはそれがゆかいでたまりませんでした。

そのうちに、だんだんにおなかがすいて来ました。男の子は道ばたのいけがきのまえを流れている、小さな川のふちにすわつて、パンを食べました。そして、すきとおった、きれいな水をすくつて飲みました。それから、食べあましたかたいパンの皮は、小さくくだいて、あたりへふりまいておきました。そうしておけば、小鳥が来て食べます。これはお母さんからおそわつたことでした。

男の子はふたたびどんどん歩きました。そして、ようやくのことで、たかい、まっ青な、いつも見る岡の下へつきました。男の子はその岡を上っていきますと、れいのお家がありました。しかしそばへ来て見ると、そのお家の窓はただのガラス窓で、金などはどこにもはまっつてはいませんでした。男の子はすっかりあてがはずれたので、それこそ泣き出したいくらいにがっかりしました。

と、お家からおばさんが出て来ました。そして何かご用ですかと、やさしく聞いてくれました。男の子は、

「私は、うちの後の岡うしろの上から見える、このお家の金の窓を見に来たのです。でも、そんな窓はなくて、ただガラスがはまっているだけです。」と言いました。おばさんは、くびをふって、

「私の家はびんぼうな百姓ですもの。金などが窓についているはずはありません。金よりもガラスの方があかるくていいんですよ。」

こう言つて笑いながら、男の子を戸口の石だんにこしをかけさせて、お牛乳ちちを一ぱいと、パンを一きれもつて来てくれました。おばさんは、それから、男の子とちようどおない年ぐらいの女の子をよび出しました。そして、二人でおあそびなさいというように、うなず

いて見せて、ふたたびお家へはいつて仕事をしました。

その小さな女の子も、じぶんとおなじように、はだしのままで、黒つ茶けた木綿もめんの上着うわぎを着ていました。しかし、その髪の毛は、ちようど、男の子がいつも見ている光つた窓のように、きれいな金色をしていました。それから目は、ま昼の空のようにまっ青にすんでいました。

女の子は、にこにこしながら、男の子をさそつて、お家の牛を見せてくれました。それは、ひたいに白い星のある、黒い小牛でした。男の子はじぶんのお家の、四よつ足の白い、栗の皮のような赤い色の牛のことを話しました。女の子は、そこいらになつていりんごを一つもいで、二人で食べました。二人はすっかりなかよしになりました。

男の子は、金の窓のことを女の子に話しました。女の子は、

「ええ、私もまいにち見ていますわ。でも、それは、あっちの方にあるんですよ。あなたはあべこべの方へ来たんですわ。」といいました。

「いらつしやい。こつちへ来ると見えるのよ。」と、女の子はお家のそばの、すこしたかいところへ男の子をつれていきました。そして、金の窓は見えるときがきまつているのだといいました。男の子は、ああきまつている、お日さまがはいるときに見えるのだと答え

ました。

二人は小だかいところへ上りました。女の子は、

「ああ、今ちょうど見えます。ほら、ごらんなさい。」といいながら、向うの岡の方をゆびさしました。

「ああ、あんなところにもある。」と男の子はびっくりして見入りました。しかし、よく見ると、それは岡の上のじぶんの家でした。男の子はびっくりして、私はもうお家へかえるといい出しました。そして、もう一年もだいにポケットにしまっていた、赤いすじが一すじはいった、白い、きれいな小さな石を、女の子にやりました。それから、とちの実を三つ、びろうどのようなつやのある、赤いのと、ぽちぽちのついたのと、牛乳のような白い色をしたのと、その三つをやりました。そして、またこんどくるからといって、おおいそぎで走ってかえりました。女の子は、男の子があわててかけてかえるのを、びっくりして見おくっていました。きらきらした夕日の中に、いつまでも立って見ていました。

男の子は、息をもやすめないで、どんどん走ってかえりました。しかし道がずいぶんとおいのお家へついたときには、もうすっかり暗くなっていました。

じぶんのお家の窓からは、ランプのあかりと、ろのたき火とが、黄色く赤く見えていま

した。ちょうど、さつき岡の上から見たときとおなじように、きれいにかがやいていました。男の子は、戸をあけてはいました。お母さんは立って来て、頬ほおずりをしてむかえしました。小さな妹も、よちよちかけて来ました。お父さんはろのそばにすわったまま、ここにこしていました。お母さんは、

「どこへ行って来たの？ おもしろかった？」と聞きました。

「ええ、ずいぶんゆかいでしたよ。」と男の子は、うれしそうにいいました。

「何かいいことをおぼえて来たかい？」とお父さんが聞きました。

「私は、じぶんたちのこのお家にも、金の窓がついているということをおそわって来ました。」と、男の子はこたえました。

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年12月

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

岡の家

鈴木三重吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>